

ん。兵十万、居留民三千の帰還のため乗船地連雲港に先遣幕僚部を設置、高級参謀を長として私も部員となり鄭州を脱す。飛行機で逃げた。飛行機は既に日の丸を消され青天白日、飛行士は沢登軍曹で同じ山梨県人である。

乗船地における経理勤務中に軍未着。従来よりおる部隊、主に集結せる居留民約一万に対する糧食補給で軍の糧秣を与えるのだ。連雲より虚構駅に至る線路の両側教キロに野積みの八幡に送る石炭の山である。その引き渡しもある。数量の把握など困難で仕事に忙殺される。汚職の国柄実数量では受け取らず、とはいえ石炭実数そのものがつかめず推定量となる。

南陽は孔明「草廬三顧」の地、臥竜廟を保護するために鷹森司令官より賞せらる。

語るべきことも多きも紙教尽く。

## 北支山西省を北から南へ

宮城県 舞 巖 文 哉

先に同年兵の恩欠者の方より「平和の礎」の第十巻を送られましたので読ませていただきましたが、読んでいるうちに、また読み終わってから、まずこの体験記執筆者の方々が、軍隊当時の模様や行動、そして月日、時間等について明確に記載されておられることに全く驚きました。

ところが、この同年兵から「どうだ軍隊の思い出を書いてみないか」という連絡がありました。しかし皆さんの体験記を読んでおきまして、私には何も資料がないこともありましてお断りしたのですが、再度ぜひにというお勧めで、「では思い浮かべ、また記憶を呼び起こして、ボケ防止のために」という気になり、書いてみることに同意したのです。何せ六十年の前のことで資料もございませんので、その内容につきまし

ては実際の行動や月日等に大なり小なり違いはあると思いますが、その点につきましてはご了承下さいませようお願いいたします。

私は昭和十七（一九四二）年二月に新潟県高田市の歩兵第三十連隊に入隊しました。部隊長は後にアツツ鳥で玉碎された山崎保代大佐でした。

班内には満州から内地へ帰還された古年次兵が同居しており、この古年兵が夜になると我々陸軍二等兵の両頬に強く刺激を与える役を勤めており、まるで暴力団の事務所にも連れ込まれたようなものでした。

このような惨めな班内生活が一週間ぐらい続いた八日ごろ、出発命令によって行く先不明の汽車に乗せられて高田の駅を出発しました。

汽車の窓は密閉で走り、そして船に乗り継ぎ、また汽車に乗って、十四日から十五日ごろに鮮満国境の安東、満支国境の山海関を通過して中国に渡って、その後、どう走ったものか知らされることもなく、二十日ごろに着いた所は北支の山西省の北部に位置する大栄

鎮という城壁に囲まれた小さい部落でした。

この大栄鎮は独立混成第三旅団第六大隊第一中隊が駐屯していました。この大栄鎮は汚い城壁の城内に日本の軍隊と中国人が道路を境に住んでいる所で、殺風景な部落です。営門をくぐって兵舎内に入ると、中国特有の土で造った今にも崩れそうなお粗末な建物で、その庭に我々初年兵が整列して中隊長の訓示を受け、班の編成となりました。私は機関銃の班員となったのです。

班長は十五年徴集で、石門の下士官候補者の教育隊を抜群の成績で卒業し、しかも優秀なために方面軍司令官から銀時計を授与された伍長で、助手は、この班長と同じ昭和十五年徴集で初年兵の入隊当時から半長ごとに進級した。脳は冴え、足はカモシカのように速く、そのうえ戦闘が大好きという、この人ぞ日本の軍人というような万能役者でした。この優れた班長と助手の教育指導でしたから気合の入ること他の班の追随を全く許さないものでした。

大栄鎮に入隊して最初の思い出は、昭和十八年一月

一日のことでした。皇居を遙拝して、その後に勤務に支障のない中隊員が全員で城壁を一周する駆け足の競技会がありました。城壁を一周すると約一二〇〇メートルでした。賞品として一等は清酒五本、二等は三本、三等は一本ということで、足には自信のあった私は心の中で清酒五本は俺のものと思いつながらのスタート、ところが何と速い者がいるもので、私より先に走るのは私たち機関銃の教育助手の兵長で、とても追いつくことは出来ず、結局、私は三本止まりとなりました。その後、営庭で祝賀会がありました。私は当時一滴も駄目だったので、古年次兵の方たちで処分されたのでした。

このころは一月で、寒さは厳しいものでした。昭和十年を過ぎたころの流行歌の歌詞に「銃は煌めく身は凍る 庸徼北支の歩哨線」とありましたが、全くその通りでした。東北育ちの同年兵も、この寒さには相当地に悲鳴を上げたものでした。その寒さの中の演習、衛兵、不寝番あるいは討伐分遣との連続で、アツという間に一期の検閲の終わりの時がきました。この

ころになると初年兵はホッと一息ということになり、今までの寒さも苦労も春の雪解けの水に全部流されてしまった感じになって気分の良いものでしたが、このような時期になると同年兵はそれぞれの修業にと大栄鎮を去って行くのでした。

四月の上旬だったと思いますが、昭和十八年春の大行作戦があったので中隊の古年次兵や同年兵は、この作戦に参加のため出動しました。私は下士官志願でしたので、その集合教育が原平鎮で行われるので残留組に編成されたのです。残留組の人数は小教なので不寝番や衛兵勤務は連続のようにあったものです。衛兵勤務では旧の十四日ころや十五日ころには、城壁の上での動哨勤務中に東の方から大きなお月様が上がってくるのを見ると、あの方向が日本かと懐かしく故郷を思い出したものでした。

五月下旬に作戦に出動中の古年次兵たちや同年兵が、疲れた顔色でしたが、みんな元気に帰隊してきました。この時、小隊長で出動した曾根少尉が敵弾を鉄

帽に受けて、穴の開いた鉄帽を見せられた記憶があり、戦闘の激しかったことを思い浮かべたこともありました。

私は七月中旬ころ、下士官候補者として旅団の集合教育を受けるために、原平鎮の教育隊に入隊しましたが、教育演習も厳しく、暑いのに参ったものです。

九月上旬ころに北支方面軍による「十八秋冀西作戰」があり、我々もこの作戰に参加したのですが、作戰中は皮肉にも雨降り続きで、道はぬかるみの悪路であり、それに地雷の埋没で、この地雷による犠牲者は数多く出ました。

このころに旅団の副官が狙撃兵に胸部と腹部を撃たれて重傷を負い、この副官を後方の病院に搬送するたために、臨時の飛行場作りとなって、荒地を整地しました。ある程度出来上がったころに友軍の飛行機の到来となり着陸したのですが、地盤が軟弱なために車輪が地面に食い込んでしまい、飛行機が動けなくなったのです。それで飛行機を皆で引っ張り上げて、再び作業開始となったのですが、副官の病状が悪化して戦死

し、帰らぬ人となったのでした。

戦果はあったものかどうか分かりませんが、十月下旬ころに作戰は終わりとなったので、我々は原平鎮の教育隊に帰隊しました。

十二月一日に石門の下士官候補者の教育隊に入隊することになっていたので、それまで環境の整理が日課となりました。十二月一日に石門の教育隊に入隊したのですが、その営門を緊張した気持ちでくぐったものです。そしてその堂々たる建物が何棟も整然と建ち並んでいたのには驚きました。今まで大栄鎮や原平鎮の汚い建物ばかり見ていたので、両者の差には驚きました。内務班等も、やはり教育の場にふさわしい充実した諸設備でした。

ここで教育を受けて人並みの兵隊にと思ったのですが、初年兵教育と一八〇度がらりと変わった教育指導で、何を先に勉強すれば良いのかと戸惑うものでした。分隊長は常に第一線においてどのようにしてその任務を遂行出来るか、区隊長（大尉）はいろいろな想

定を作つての指導教育でした。壕を利用する演習も数多く計画されており、服などは泥だらけ、洗濯しても乾くのに時間がかかるので半乾きの服を着たことも再三でした。演習場は隊から約三キロぐらゐの地点にある広々としたところで、その付近にはアンズの木が林のように植林されていて、四月の卒業記念演習の時には、アンズの花の真つ盛りの満開、花はきれいでその匂いは芳しく、その香りは心にのこるほどに感ずる見事なものでした。

四月の末に卒業し、一人前の兵隊になった気持ちで石門の教育隊と別れて原隊の第百十四師団の駐屯地に着いて、司令部で卒業して来た旨の申告をしたところ、その将校から「今日から司令部の直轄小隊となつて補充教育をする」という、全く予期しなかつたその一言に、一緒にいた同年兵はあ然となつて、開いた口がふさがらなかつたのでした。今までに一年半も連続で教育を受けてきたし、特に下士官候補の教育を受けて卒業してきたのに、今度はどんな教育をするのか、誰が教官なのかと疑問に思いましたが、とにかく黙々

と小銃を担いで教育を受けたのです。

八月の末ころ、私は少尉の教官から呼ばれて命令を受けました。その内容は「司令部からの命令であるが、臨汾に駐屯している各中隊を巡回して、機関銃の対空射撃の指導教育をやれ」ということで、私は驚きました。こんな大きな師団の大部隊に対空射撃を指導する者がいないのかと思ひました。

この対空射撃というのは機関銃の出身者でも、そう簡単に技術の修得ができるものではありません。私もその一人です。私は数多く教育を受け復習はしたけれども、一人前の技術の修得者とは言えない。高度な技術を要するものです。それでも何とか命令に従ひ各中隊を巡回して教育を終わつたのです。

十月初旬、補充教育は終了したので、同年兵は各人の部隊に帰隊するようにとのことで、籠から放された小鳥のように飛んで原隊に復帰したものです。私は原隊が河津に駐屯していたので、河津に行き申告したところ機関銃中隊に転属を命ぜられ、部隊本部より西北

約一〇キロの駐屯地、神前村に行き機関銃中隊の一員となりました。この時、隊長から「お前はもうすぐ任官するから」と言われ下士官室を与えられた時はうれしかったものです。

その反面、勤務の方も下士官としての責任のあるもので、それでもそれなりに度胸も出来て、八路軍と遭遇して撃ち合いとなった時にも、分隊長としての責務を果たしました。

昭和十九年十二月には、十九年の初年兵約五十人が機関銃中隊に入隊してきたので、初年兵教育の助教を命ぜられ、部隊本部の河津で教育の任に当たりました。

昭和二十年三月末頃に初年兵教育は自然と終了しました。やれやれ一服と思っている時に、今度は「禹門口分遣隊長を命ずる」とのこと、急流で名高い禹門口の分遣隊へ行くことになりました。この分遣隊の建物の後方約三〇〇メートルの陸続きに洞窟があり、この洞窟に敵約三〇〇人位が我が軍の監視と警備に居住している。しかし、我が禹門口分遣隊と洞窟の間の平

坦地には、我が軍が何万あるいは何十万個という地雷を埋設したので、両軍とも絶対にこの地を歩くことはできなかったのです。分遣隊の建物は黄河の縁に建てられ、川の向こう岸には中央軍の陣地があり、毎日陣地を構築しているのが双眼鏡ではっきり見ることができ

る。禹門口の分遣隊と川の向こうの中央軍との距離は約三〇〇〜四〇〇メートルで、双眼鏡には油を売っている兵隊が良く見えたので、どこでも同じことだなあと思ったものです。分遣隊と敵との距離は近くても警戒を厳重にして、心に緩みさえ与えなければ、襲撃を受けることはまずないと考えて良いので、私は骨休みのつもりの勤務でした。

この骨休みもつかの間で、五月中旬頃に、今度は「昭和十九年徴集の下士官候補の集合教育を旅団司令部の駐屯地で行うから、その教育の助教をやれ」とのこと、せっかくの骨休み中なのにと少々一人で文句を言いながら私物箱に私物を入れ、さらにその箱の隙間に、さしあたり使うだろうと思われる軍用紙を詰め

て、教育隊に行きました。

その兵舎はガランとしていて、炊事係の日本兵が三人と中国人の少年一人の計四人が建物内に残っていました。まず下士官室にて靴を脱ぎ、整頓棚に私物箱を上げて、その日は床に就いたのですが、翌朝六時頃に下士官室の入り口のドアが開く音がしたので誰だろうと思って起きてみると、吃驚仰天とはこのこと、ベタ金に星一つの階級章を付けた旅団長でした。まずもって敬礼をしたのですが、旅団長は整頓棚の私物箱を指さして「あれは何だ」と聞く。私は「私物箱です」と答えると「開けろ」と言うので開けたところ、中から陸軍郵便、通信紙、それにザラ紙が出て来たので、これを見た旅団長に「これは私物か」と大きな声で怒鳴られました。

私は持つて来た理由と私物箱に詰めた理由を何回も説明しましたが、何回説明しても理解してもらえず、閉口しました。

この出来事は教官の少尉が副官に呼ばれて、旅団長が大変怒っていることを話されたそうです。少尉も私

物箱に入れた理由を副官に話したようですが、副官は理解しても旅団長がなかなか頭を縦に振らないので、少尉は何回も副官にお願ひして、ようやく頭を縦に振らせて納得させ、起訴猶予となったのです。

作戦名は忘れましたが、八月の十日頃に作戦行動を開始して、約一週間も行軍した頃に、昨日来た道を逆戻りして旅団に帰隊しました。この時に日本は降参したことを知らされました。それからは集結地である楡次に向かつて昼夜を問わぬ強行軍でした。途中に八路軍や山西軍の襲撃があると噂は流れており、野営の陣地に機関銃を据えて、寝ずの警戒をしたこともありました。

雨に打たれながらの苦勞に苦勞を積み重ねて、九月末頃にやっと楡次に到着しました。楡次に着いたところが何の勤務もないので、昼は将棋と碁、それに花札と下士官室で毎日楽しんでいたものです。夜になると下士官の古参軍曹が、どんな所でどんな方法で金を調達するのか、懐から金を出して、二人か三人の下士官に「あんたは酒」「あんたは野菜と肉を買ってきな

い」と言って金を渡し、料理の上手な下士官には「あんたは買って来た材料で夕食時までには料理を作りなさい」と言いつけて、夕食時には、その料理で下士官全員で会食するのでした。機関銃の下士官は十人くらいいたと思いますが、結構料理の上手な者もいて、夕食時が待ち遠しいものでした。

下士官室の隣の部屋が中隊長の部屋になっており、この料理の匂いが隊長室に筒抜けなので、酒好きの隊長が下士官室に入ってきて「金は出すから僕も仲間に入れてくれよ」と言うので、その後の会食は、時には一緒に会食をしました。この隊長は温厚な方で、非情に部下から慕われていました。

そんなことを楽しんでいるうちに、私にまたもや分遣行きの命令がきました。それは復員列車の安全通過と鉄道沿線の警備のため第一中隊に派遣を命ずるということで、約十五人の隊員と、第一中隊の駐屯している段延站に行き、鉄橋と中隊本部の中間地点に陣地を構えてその任に服しました。しかし終戦直後のこと

で、敵襲は考えられないので、割合安心感のある勤務でした。

私は特に用もないので、分遣地点のすぐ裏にある野原で山鳥を撃っていました。収穫はまずまずでしたので、お正月に隊員と一緒に食べようと塩漬にして保管していたものが、正月近くになって全部犬か猫に整理されてしまいました。これも悔しい思い出でした。

昭和二十一年三月中旬頃に機関銃中隊に復帰するようにとの命令で復帰し、部隊では銃剣術や演芸会があつて、みんな和気あいあいしていました。

四月中旬頃に部隊の副官より呼び出しがあり、何のことだろうと副官室に行くとおまえが初年兵の時の班長が今太原にいるが、お前に会いたいと言ってきておるので行って会ってこい」と言われ、早速太原行きのお汽車で太原の駅に下車すると、中国の軍服に大尉の階級章を付けた元班長が待っていました。

歩き出して余り遠くないところに二棟の建物があり、その一棟が官舎だなと思いました。割とさっぱりした建物で、その建物の中には誰もいなかった。夕方



でもあったので二人で飲みはじめました。その頃の私は相当の酒豪家となっていましたので、思う存分飲んでいたので、その最中に「時に舞臺、おまえ中国に残らないか、お前は軍曹だから中尉の將校になれる、そして九二式重機関銃の教官をやれ」ということで、最初は突然のことで驚きました。「俺は残らない、必ず日本に帰る」と断わったので、話はそのような平行線のままで床に就きました。翌朝、目が覚めると隣の部屋には珍しい中国のごちそうが準備してありました。それを食べてから元班長は「俺は本部に行ってくるから、帰るまで待っている」と官舎を出て行ったのです。私は何となく不安であり、強硬に足止めされるのでは大変だと心配になってきました。

表はどうなのかと玄関から道路に出て、楡次の方に行く車もあるかもしれないと、道路の向かい側を見ると自動車の修理工場のような店がありました。すると官舎の方から中国人の兵隊が出てきて、「お前が軍曹か、大尉からおまえを外に出しては駄目だと言われたから出るなよ」とのこと。これは大変だと思い「出な

いから安心しろ」と言うと、動哨しはじめました。それで建物の中に入り、服装を整えて道路の方を見てみると、自動車修理工場の前に一台のトラックが止まっているので、歩哨の動きを見ながら、そのトラックの運転手に「どこへ行くんだ」と聞いたところ「楡次まで」ということなので、今までのことを話して「自動車に飛び乗るから、すぐ発車してくれ」と頼み、隙を見て飛び乗り、無事楡次の中隊に帰って来たのです。もし残留していたとすれば、今まで生きていたかどうかと、度々当時を思い出すことがあります。

太原から帰ってきて、このことを副官に話したところ「よく帰って来た、元気で一緒に内地に帰ろう」と温かい言葉でした。そして復員の五月に、楡次から塘沽港へ、そして懐かしの山口県仙崎港に上陸して、無事再び日本の土を踏むことができたのです。

このように中国山西省の北端から禹門口の南端までの三年六カ月の歳月は流れて、軍隊生活は終わったのでした。復員後は、春になると毎年、旅団主催や部隊

主催の靖国神社の慰霊祭に参列して、亡き友のご冥福を祈っておりましたが、最近体の調子もあまり良くないので、ここ五年ばかりごぶさたいたし、居住地にてご冥福を祈っているこの頃です。

楽しいこともあったし、苦勞もありました。怒られて身の縮む思いもしました。生きて帰って来たことを幸いとして、これから先は呑気に歩みたいと思っております。